

衣服選択における意識と実態に関する調査研究

前田 亜紀子¹⁾・野口 愛²⁾

1) 群馬大学教育学部家政教育講座

2) (株)資生堂

(2013年9月18日受理)

A research on the attitude and consciousness on clothing selection

Akiko MAEDA¹⁾, Megumi NOGUCHI²⁾

1) Department of Home Economics, Faculty of Education, Gunma University

2) Shiseido Company, Limited

(Accepted on September 18th, 2013)

1. 目的

現代社会における衣生活は、既製服がその中心的な役割を果たしている。衣服は大量生産、大量消費され、使用年数は短く浅くなっている(鷺見, 2008)。また、多種多様な衣服素材が開発され選択肢が増えることや、インターネットを利用した通信販売の手軽さは、一見すると消費者にとってプラスだが、情報過多による合理的判断の阻害(佐藤ら, 2013)や衣服の着心地に影響するサイズや素材の確認といった、衣服選択時の重要な過程が欠如する可能性が大きい。さらに、こうした衣生活の状況は、死蔵衣類を増やす要因ともなっている(堀内, 2003)。

家庭科教育の衣生活領域では、被服の選択、着用、管理、保管、処分といった被服行動について総合的に学習し、小・中・高等学校を通じて体系的な衣生活教育が行われている。しかしながら、被服行動に関する様々な問題点が指摘されていることから(岡村ら, 1997、小林ら, 2004、滝山と松尾, 2008)、それらの改善は家庭科の衣生活領域において、依然として一つの課題となっている。

本研究では、衣服の選択における意識と実態に注目し、被服行動の一連の流れの傾向を把握すること

を目的としてアンケート調査を行った。データは性差および、学生と一般の違いによって比較するとともに、被服行動の衣服選択を見直すことで、いかに死蔵衣類の抑制に結びつくか、その方策について考察する。

2. 方法

2.1 調査方法

本調査は自記式質問紙による留置法、集合調査法、郵送法とWEB版アンケート調査法を併用して行った。調査の協力依頼および用紙の配布は、2012年8月18日～10月31日にかけて行い、11月12日を回収の締切日に設定した。

WEB版のアンケート調査では、フリーのインターネットサービスサイト(Mr.アンケート：<http://www.smaster.jp/>)を利用した。併せて、携帯電話やスマートフォンからURLにアクセス可能なQRコードを作成し、協力を募った。

2.2 調査対象

対象は、高校生(15歳)以上の男女とした。これは、義務教育機関である小・中学校において、家庭

科の授業を受けたことがあることを前提とし、家庭科における被服領域の授業内容が、被服の選択に影響を及ぼしているか検討するためである。

アンケート用紙の配付数は781票で、うち525票を回収した。有効回収数は515票（有効回答率65.9%）であった。また、WEB版による回答数は223票で、うち201票が有効回収数（有効回答率90.1%）であった。両者の総計は716票であり分析対象とした。

本調査では、性差および、学生と一般に区分した。学生とは年齢区分ではなく、現在、学生の身分にあるとの回答による。解析対照を学生男女と一般男女の4群に分け、表1に回答数と年齢を示す。

表1 各群の回答数および年齢

項目	学生		一般	
	男性	女性	男性	女性
回答数(人数)	175	266	37	238
年齢平均(歳)	18.7	19.2	39.6	36.5
標準偏差	2.0	2.5	11.2	7.3
年齢範囲	15-28	15-35	22-63	22-60

2.3 調査内容

記入用紙はA4版3頁からなる。質問事項の構成は、①基本事項（性別、年齢、職業・身分〔学生、会社員、自営業、公務員教員、専業主婦、フリーター、その他〕、身体寸法、衣服サイズ、アレルギーの有無）、②衣生活に関する事項（衣服への関心と興味、日常生活における衣服の購入や着用を想定した11項目）、③小・中学校家庭科で教習する被服分野の知識に関する事項（被服素材、被服管理に関する6項目）、④家庭科の授業に関する事項（2項目）、⑤死蔵衣類に関する事項（死蔵衣類となる理由、処分方法の2項目）とした。

2.4 統計解析

統計解析は統計ソフトSPSS (IBM社、ver.21.0J)を用い、基礎統計量を求め、性別および各群のクロス集計、 χ^2 検定を行った。

3. 結果および考察

3.1 基本事項

自己申告に基づく各群別の身体寸法を表2に示す。全群で身長は記入されているものの、体重の記入率は低く、特に学生女性の未記入率は40.2%と顕著であった。

さらに、全群ともに、胸囲（男性はチェスト、女性はバスト）、ウエスト、ヒップ（女性のみ）の未記入率はさらに高く、一般男女<学生男女であった。

学生女性の体重の未記入率の高さは、瘦身志向の影響が少なからず関係している。若年女性の瘦身志向は、衣服選択時の意識や被服行動に関連することが報告されている（扇澤ら，2007）。

また、身長、体重以外の身体寸法は、衣服のサイズ表示に関わっているが、高校生に実施されたアンケート調査によれば、自己の身体寸法を正しく認識できていなかった（大村と渡邊，1993）。

表2 各群別の身体寸法

群	項目	平均	SD	未記入数 (%)	
学生 男性	身長	171.1	5.4	12	6.9
	体重	62.4	8.5	16	9.1
	チェスト	85.4	7.7	163	93.1
	ウエスト	74.8	7.4	149	85.1
学生 女性	身長	158.5	5.3	14	5.3
	体重	50.2	7.0	107	40.2
	バスト	80.8	4.5	240	90.2
	ウエスト	62.7	2.7	226	85.0
一般 男性	ヒップ	87.2	5.1	219	92.1
	身長	177.2	4.2	1	2.7
	体重	69.5	10.0	1	2.7
	チェスト	95.5	4.4	23	62.2
一般 女性	ウエスト	85.2	8.3	16	43.2
	身長	158.4	7.3	8	3.4
	体重	52.3	7.0	47	19.7
	バスト	83.2	5.1	182	76.5
一般 女性	ウエスト	65.7	6.5	158	66.4
	ヒップ	88.5	6.8	192	80.7

単位：体重 (kg)、それ以外 (cm)

表3は、普段、選択する衣料サイズをSML等の範囲表示で回答させた結果である。不明だった者は全体4.2%と僅かで、対象者は自身の衣服のサイズを体

型区分表示ではなく、範囲表示で把握している。ちなみに前者は、フィット性を必要とする服種に用いられ、周径2カ所の身体寸法が加味される。

学生男女は、普段選択する衣服サイズを、LおよびMサイズと回答したものの割合が48.6%および56.0%を占めるが、表2の身体寸法の平均値をJIS規格の範囲表示に換算すると、学生男女は各々MおよびSサイズに該当する。

前述の大村らによる高校生の調査結果では、フィット性を必要としないTシャツなどのSML表示(範囲表示)は、各身体寸法や他の衣料サイズ表示内容(例えば体形区分表示)に比べると、正しく理解している割合が高かったが、それでも過半数以上が誤答であったという。

今日、瘦身志向や輸入衣料の影響から、アパレルメーカーで独自の企画でサイズを展開し供給している。身体寸法を理解していないことも含め、学生は1サイズ大きい衣服サイズを選択することで対応している可能性が示唆される。

表3 普段選択する衣服のSML等のサイズ(%)

	学生		一般	
	男性	女性	男性	女性
S	5.7	12.0	2.7	7.6
M	30.9	56.0	18.9	43.3
L	48.6	27.8	43.2	25.6
LL	7.4	3.0	18.9	8.4
3L	2.3	0.4	8.1	0.8
その他	0.6	0.0	0.0	0.0
複数回答	2.9	0.4	8.1	12.2
不明	1.7	0.4	0.0	2.1

3.2 衣生活に関する事項

図1は衣服に対する興味である。男性よりも女性が有意に高く(p<0.01)、布施谷ら(2004)によれば、女性は母娘世代ともに、ファッションへの興味は、様々な生活の事柄の中で、常に上位を占めている。

表4は「衣服の選択時に参考にする事」を複数上位3位まで回答させ、各群間でクロス集計した結果である。

女性は男性に比して、「雑誌」や「テレビ」(**:

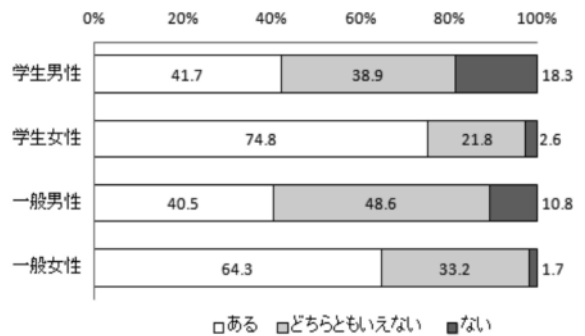


図1 衣服に対する興味(%)

p<0.01)といった広告媒体を中心に、複数の情報媒体を活用して衣服を選択している。一方で男性は、参考にすることが「特になし」が有意に高く、衣服への興味の低さと連動していた。さらに、学生男性は他群が参考とする「店頭ディスプレイ」も有意に低かった(##: p<0.01)。ただし、一般男性は「家族」は参考にしていることから(##: p<0.01)、生活環境や経済面の違いが反映しているものと考えられる。

表4 衣服の選択時に参考にする事(%)

選択参考項目		学生		一般	
		男性	女性	男性	女性
雑誌	**	34.3	74.1	16.2	53.8
テレビ	**	13.7	24.4	8.1	22.7
インターネット		14.3	18.8	18.9	21.8
店頭ディスプレイ	##	41.7	61.7	64.9	69.3
店頭販売員		12.6	12.4	18.9	18.1
家族	##	10.9	19.5	35.1	13.0
友人		27.4	29.3	8.1	13.4
広告		12.0	12.4	13.5	15.5
特になし	**	34.3	7.9	21.6	11.3
その他		4.0	3.8	8.1	2.5

性差** : p<0.01、群差## : p<0.01……χ² test (複数回答)

表5は「衣服の購入時に重要視する項目」、表6は「衣服の着用時に重要視する項目」(いずれも複数上位3位まで回答)のクロス集計結果である。

購入時は全群で「価格」を重視していた。また、一般女性は他群が強く重視している「デザイン」よりも、「洗濯方法」や「サイズ」、「場所場面」を有意

表5 衣服の購入時に重要視する項目 (%)

購入重視項目	学生		一般	
	男性	女性	男性	女性
デザイン ##	77.1	92.5	78.4	15.5
ブランド	16.0	15.0	24.3	4.6
流行	18.3	18.4	5.4	13.0
価格	75.4	82.7	73.0	73.5
洗濯方法 ##	1.1	5.6	5.4	17.6
素材	13.7	7.5	16.2	21.4
サイズ ##	42.9	44.4	59.5	28.2
原産国	0.0	0.4	0.0	0.8
着心地	17.1	16.2	18.9	21.8
場所場面 ##	13.1	11.3	5.4	25.2
その他	1.1	0.8	0.0	1.3

群差 ## : $p < 0.01 \cdots \chi^2$ test (複数回答)

表6 衣服の着用時に重要視する項目 (%)

着用重視項目	学生		一般	
	男性	女性	男性	女性
デザイン	67.4	74.8	67.6	64.3
ブランド **	14.9	6.8	16.2	2.9
流行	16.0	21.4	2.7	13.0
価格	17.1	13.9	24.3	17.2
洗濯方法 ##	0.0	1.5	0.0	10.5
素材	12.6	9.0	16.2	16.4
サイズ	36.0	29.7	29.7	20.6
原産国	0.0	0.0	0.0	0.4
着心地 ##	30.3	25.2	21.6	43.3
場所場面	46.3	57.1	56.8	64.7
天気	29.7	43.6	40.5	33.2
体調	4.0	6.0	2.7	4.2
その他	3.4	0.8	0.0	0.4

性差 ** : $p < 0.01$ 、群差 ## : $p < 0.01 \cdots \chi^2$ test (複数回答)

に重視する傾向が認められた (## : $p < 0.01$)。

購入時とは異なり、着用時は全群で「デザイン」と「場所場面」を重視している。ただし、一般女性においては、購入時と同様に、「洗濯方法」を重視する傾向があり (## : $p < 0.01$)、被服行動の一貫性がある。さらに「着心地」といった機能性も重視していた。被服行動の一連性は、次項の被服素材や管理と

も関連し、意識と実態を結びつける体系的な衣生活教育が望まれる。

また、男性は女性より、着用時に「ブランド」を意識しており (** : $p < 0.01$)、選択時に参考とすることが「特でない」代わりに、特定のブランドに頼って入手していると考えられる。

3.3 被服の素材と管理に関する事項

衣服の管理に関して、購入、洗濯、手入れ、保存、処分の各項目を担っている人物(担い手)を複数上位2名まで回答させた(表7)。

表7 種々の衣服管理の担い手 (%)

項目担い手		学生		一般	
		男性	女性	男性	女性
購入	自分	83.4	93.6	89.2	97.5
	母	38.9	44.4	0.0	2.1
	配偶者	0.0	0.0	40.5	4.2
	その他	8.6	5.3	0.0	2.5
洗濯	自分	58.3	68.0	48.6	97.1
	母	50.9	59.8	10.8	5.5
	配偶者	0.0	0.8	67.6	8.0
	その他	16.0	9.0	2.7	2.1
手入れ	自分	68.6	85.3	54.1	98.3
	母	48.0	49.2	8.1	2.9
	配偶者	0.0	0.4	59.5	1.7
	その他	9.1	4.9	0.0	2.1
保存	自分	85.7	95.9	64.9	98.7
	母	34.9	29.7	2.7	1.3
	配偶者	0.0	0.4	45.9	2.1
	その他	6.3	2.3	5.4	1.3
処分	自分	78.3	91.0	78.4	98.7
	母	40.0	37.6	2.7	1.7
	配偶者	0.0	0.0	43.2	1.7
	その他	7.4	3.0	0.0	2.1

(複数回答)

一般男性を除く各群の最多は、「自分」であり、次いで学生は男女ともに「母親」であった。一般男性の家事の担い手は、「洗濯」、「手入れ」において、「配偶者」が最多であった。性別、年齢を問わず、総じて、家庭内の衣服管理全般を女性(母親や配偶者)

が担っている現状が窺える。

運動時、冬の外衣、ネクタイのそれぞれに最も適した衣服素材を選択肢の中から回答させた(表8)。一般女性は全場面に適切な素材を選択できているが、他群、特に学生男性の素材に対する関心や知識は低い。ただし近年、ポリエステル100%の機能性繊維を用いた運動着があり、特定の情報は入手している。

表8 各場面に最適な素材 (%)

場面	素材	学生		一般	
		男性	女性	男性	女性
運動	綿 100%	28.0	47.7	40.5	58.0
	絹 100%	4.0	3.8	0.0	0.4
	麻 55%レーヨン 45%	4.0	6.0	13.5	3.4
	アクリル 65%毛 35%	3.4	3.8	2.7	0.4
	ポリエステル 100%	50.9	32.3	37.8	23.5
	レーヨン 100%	1.7	0.8	0.0	1.7
	不明	8.0	5.6	5.4	12.6
冬の外衣	綿 100%	49.7	32.3	27.0	12.2
	絹 100%	8.6	4.9	5.4	1.7
	麻 55%レーヨン 45%	3.4	3.4	5.4	0.8
	アクリル 65%毛 35%	18.3	45.1	48.6	65.1
	ポリエステル 100%	7.4	4.5	8.1	5.9
	レーヨン 100%	2.3	2.6	2.7	0.8
	不明	10.3	7.1	2.7	13.4
ネクタイ	綿 100%	18.3	12.8	5.4	5.5
	絹 100%	23.4	30.1	32.4	39.5
	麻 55%レーヨン 45%	10.9	11.3	18.9	7.6
	アクリル 65%毛 35%	10.9	6.8	2.7	2.9
	ポリエステル 100%	16.6	20.7	18.9	16.0
	レーヨン 100%	10.3	9.0	8.1	3.8
	不明	9.7	9.4	13.5	24.8

図2の取り扱い絵表示(ア~エ)の理解度は全般的に高いが、正答率は男<女であり、(ア)の一般男性54.1%から、(ウ)の一般女性98.7%であった。

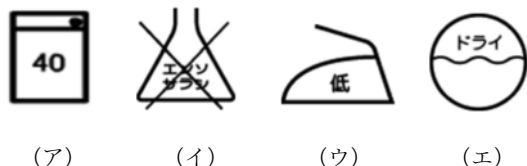


図2 質問した取り扱い絵表示

3.4 家庭科の授業に関する事項

これまで既習した家庭科の授業が、現在の衣服選択に役立っていると回答したものは、全体の3割に満たなかった(図3)。介護福祉士養成課程に所属する女子短大生で実施された衣生活管理の意識と実態に関する調査結果では、衣生活領域の学習経験や取り扱い絵表示の理解は高いにもかかわらず、衣服の管理を実践し、考慮して衣服を選択できるものは半数程度で、学校教育での衣服管理学習が、実生活に結びついていない傾向があった(鷺見, 2008)。

役立つと回答した者にとって、衣生活のどのような事項において役立つかたずねたところ、「取り扱い」「気候への配慮」「場所場面にあった選択」であった。衣服の機能性を重視するものは購入時の経済性も重視する傾向がみられ、ひいては、衣服全般に対する意識や知識への関心も高いという(鷺見, 2008)。

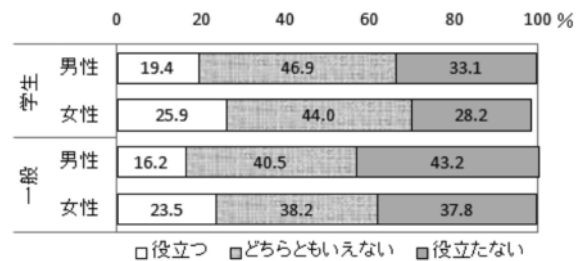


図3 既習の家庭科の授業が衣服選択時に役立つか

3.5 死蔵衣類に関する事項

死蔵衣類になる理由として、全群で「デザインが合わない」が最多であった。特に、着用および購入時ともに「デザイン」を最重視していた学生女性の54.5%が、「デザインが合わない」を理由としている。処分方法に関しては、全群ともに60%以上が「ゴミとして捨てる」を選択した。

中学校学習指導要領技術・家庭科家庭分野において、「身近な消費生活と環境」領域が設定され、身近な消費生活の視点から持続可能な社会を展望して、環境に配慮した生活を主体的に営む能力を育てることがねらいとされた(文部科学省, 2008)。

家庭科の学習指導において、衣生活と環境を身近な消費生活の題材として設定する試みは、はじまっ

たばかりである(一法師, 2011)。これによれば、衣服の「購入―活用―廃棄」の一連の被服行動を、消費生活と環境として身近に感じさせることで、中学生が生活者の立場で「自己の生活」「環境への影響」という両面から、十分に考えることができ、変容したという。

4. 結論

高校生(15歳)から一般(63歳)におよぶ、男女716票のアンケート調査から、被服行動の特徴と家庭科の学習経験、衣服の消費に至る意識と実態について検討した。本調査の対象群は被服行動全般において、衣服の機能性や管理は重視せずに衣服を選択していたが、一般女性においてのみ、家庭内の衣服管理を担っている現状から、他群よりも「洗濯」や「着心地」といった、衣服の管理と機能性を重視する被服行動の一連性があった。

現代の幅広い衣服選択肢の中で、外観嗜好に陥らず、自身の正しいサイズを把握し、管理まで考えて衣服を選択することが、死蔵衣類の抑制につながると考える。そのためには、小・中・高等学校を通じた衣生活領域と消費生活を連結させ、体系的に家庭科を学習させる指導案づくりが重要である。

また、家庭科の授業が現在の衣生活に役立っていると回答したものは3割に満たなかったことから、学習内容が実生活に結びついていない。家庭科の教員免許養成課程に所属する女子学生は、小学校教員免許養成課程の女子学生より、被服の材料や管理を気にかけて衣服を選択していた(小林ら, 2004)。家庭科を教える側の教員においても、被服行動に対する意識と実態に格差が生じており、小・中・高等学校での体系的な家庭科の学習指導が欠如してしまう可能性が否めない。

一法師(2011)や岡村ら(1997)は、自立した消費者になるための衣生活領域の学習内容は、デザイ

ンに対する興味・関心が高くなる中学校1年生から習得させ、着装教育を導入しながら十分な意欲づけを行うことが重要であると提案している。家庭科の限られた時間の中で、発達段階に応じた体系的な衣生活教育の構築と、効果的で魅力ある指導方法の提案は、教員養成課程において、実態調査と並行して取り組むべき課題である。

引用文献

- 布施谷節子, 松本智絵美(2004): 被服関心・被服行動に関する女子大生と母親の相違と関わり. 和洋女子大学紀要家政系編, 44, 27-39
- 堀内雅子(2003): 衣服の消費実態と消費者教育. 群馬大学紀要, 芸術・技術・体育・生活科学編, 第38巻, 195-205
- 一法師香織(2011): 自己の消費生活のあり方を循環型社会のプロセスにおいて考えることができる生徒を育てる家庭科学習指導～着なくなった衣服から「購入―活用―廃棄」のあり方を考える学習を通して～. 大分大学教育福祉科学部附属教育実践総合センターレポート, 31, 25-40
- 小林久美, 長山芳子, 松園美和(2004): 教員志望大学生の被服購入時の意識と衣生活の実態. 九州女子大学紀要, 41(1), 11-26
- 文部科学省(2008): 中学校指導要領解説技術・家庭科編. 66
- 岡村美乃里, 諸岡晴美, 中川 眸(1997): 小・中・高等学校における体系的な衣生活教育のあり方に関する研究(1)―衣服購入および衣服整理についての調査から―. 日本家庭科教育学会誌, 40(1), 39-46
- 大村知子, 渡邊敬子(1993): 衣生活行動の基礎的能力に関わる衣料サイズ表示の理解と衣服寸法の認識―静岡県の高校生の実態―. 日本家庭科教育学会誌, 36(2), 57-64
- 扇澤美千子, 川野裕子, 川端博子(2007): 若年女性の瘦身志向と被服行動に関する研究. 茨城キリスト教大学紀要第41号人文科学, 13-25
- 佐藤典子, 徳永弘子, 木村 敦(2013): カラーバリエーションが若年女性における衣服選択の意志決定プロセスに及ぼす影響. 日本色彩学会誌, 37(1), 39-46
- 鷺見裕子(2008): 女子短大生の被服行動と衣服管理. 高田短期大学紀要 26, 143-150
- 滝山桂子, 松尾美江(2008): 授業実践への衣生活情報に対する重視度の導入: 衣生活診断教材の開発と活用. 上越教育大学研究紀要, 27, 235-244